

〈書 評〉

大前暁政著 『本当は大切だけど、誰も教えてくれない教師の仕事 40 のこと』

(明治図書, 2020 年, 207 頁, 2000 円 + 税)

飯田 令子 (京都文教大)

社会の変革と共に児童や保護者の実態は大きく変わってきた。学校に求められる役割にも変化が生じている。学習指導要領の改訂により、多くのキーワードについての理論的な理解と実践が求められている。しかし、これらの変革ばかりではなく、不易なものはないであろうか。これまでに実践の上に積み上げられてきたノウハウはもう、生かされることはないのだろうか。

まず、学校現場に目をやってみる。構成している教職員の視点から見ると、団塊の世代の大量退職以降、教員の世代交代が進み、毎年、若手教員の占める割合が急増している。一度に多くの教員を採用していることにより、産休、育休、育児短時間勤務などの制度を利用する教員も一気に増えた。補充講師、専科教員、加配教員の配置により、教職員の構成や勤務時間も多様で、常勤や非常勤の臨時的任用の教員は増えている。従来の働き方とは様相が変わり、ベテラン教員のもつ豊かな経験と知識を基にした「教師のしごと」を次の世代へ伝えるための十分な時間と人員確保という「環境」が保障されているとは言えない。つまり、学年団や校務分掌の部会を通してノウハウを伝えることも難しいのである。

また、学習指導要領の改訂に伴い、外国語活動や道徳の教科化、プログラミング教育、カリキュラムマネジメントの実現、育成すべき資質・能力の観点など、教師が学ばなければならないことはたくさんある。特に、Society5.0 が実現する社会はもうすぐそこまでやってきている。

目前に控えている GIGA スクール構想に向けた研修・準備は着々と進んでいる。

一方では、児童の発達課題の多様化、保護者の教育観、子育て意識、養育能力の多様化などにより、学校に求められるもの、教員が身に付けるべき力は多種多様になっている。

そのような中で、本書は、若年教員の疑問に的確に答えるものとなっている。著者の教師経験から「若手教師時代にこれを知っていれば苦労しなかったのに」と感じたことを惜しげもなく、しかも端的に挙げ、各章を 10 の項目でまとめている。今や時間や人員の課題があり物理的にベテラン教員から学ぶことが難しい「教師の秘訣」も、非常にわかりやすく具体的な内容で表現されている。若年教員が困ったとき、行き詰ったとき、新年度に子どもたちに出会ったときなどの節目に、ちょっと手に取って、必要な部分だけを拾い上げたとしても、的確な「答え」を見出すことができるように書かれている。ここでは、その一部を紹介することとする。

第 1 章では、「学級経営」について説明している。

教員には、学び続ける姿と指導への熱意が大切ではあるが、力が入り過ぎることで子どもの思いとの乖離を生む可能性を指摘している。「子どもの努力の継続サイクル」「教師が待つ」「トラブルや失敗を認める」など一人一人の子どもの思いを大切に、子ども主体の学級集団・学習集団を作り上げるためのノウハウをまとめている。目先の意図的な教育ではなく、環境を整

えるという一見無意図的に見える教育が必要であると説いている。

第2章では、「授業づくり」について説明している。

「授業をつくる」となると、時として指導者主体のイメージが強くなる場合がある。特に、若年教員にとっては、教師の発問や表情、授業の流れなどの裏側には、常に子どもの思考の流れがあることを忘れてしまうことがある。しかし、子どもの思いや願いがあり、それを生かしているからこそ、よい授業を紡ぎ出すことができるのである。筆者は、教材研究の大切さや子ども特有の理解の特徴を述べながらも、育成したい資質・能力を明確にし、子どもの思考の流れを大切にしたい授業と、子ども一人一人の学びを客観的に見取る教師の姿を重要であるとして、丁寧に解説している。

第3章では、「子ども理解、対応」について説明している。

教師が子どもの思いに寄り添い、しっかり受け止めることはもとより、子どもの人格を認め、成長過程にある存在であることを理解することの大切さについて解説している。問題行動の中に見える「目的」を理解して対応することで、教師はブレることなく子どもの思いを受け止めることができる。子どもが素直に思いを表出したり模索したりすることができるという「自由度」は、子どもを理解するうえで重要であることを強調している。「子どもへの対応力」は、「子ども理解力」×「指導力」×「教師への信頼と尊敬」と表現されているが、特に「教師への信頼と尊敬」を作り上げるには、日々の丁寧な積み上げが必要であるということに気付かせている。

第4章では、「教師のマインドセット」について説明している。

教材研究、学級経営、子ども理解と関係づくりなど、若年教員にとって学ぶべきこと、しな

ければならないことは山積みである。教員の心と体の健康と学び続ける姿勢によって、教師自身が心穏やかに毎日の教育活動に取り組むことができ、よい指導につながるのである。子どもの感性は大人のそれとは比べ物にならない鋭いものである。しかし、教師はそのことに気付かずに、子どもを「できない存在」「力のない存在」と見誤ることがある。本章では、そのことに警鐘を鳴らし、教師も謙虚に子どもに向き合い学び続ける存在であることを示唆している。

「本当は大切だけれど誰も教えてくれない教師の仕事」は、実は、目先のノウハウではない。日々の授業をつくる場合も、問題行動を繰り返す子どもに向き合う場合も、「教師と子どもの間には鏡の作用が働いている」と本書は伝えている。「〇〇な場合は～するとよい」といった「方法」はどの先輩教員にも共通するとは限らない。同じ方法をとれば、必ず成功するのでもない。本書から「教えてもらった」ことをどのように咀嚼するかは読み手にかかっているのである。

(令和3(2021)年7月28日受理)